

## 第8章 総括

### 1 調査のまとめ（第98・99図）

**堀** 底面は平坦で、標高も底面が箱堀状の2-3トレンチ以外は25.6～25.7mとほぼ同じである。斜面は、底部が箱堀状で急激に立ち上がる（2-3トレンチ）、階段状（2-1・2トレンチ）、緩やかに立ち上がる（3-2トレンチ）と場所によってことなる。外堤部は盛土を積み上げ堤をつくる。

規模は、上面幅11.0～12.0m、底面幅は東堀で4.5m前後、東堀-北堀接合部で6.5～7.0m、深さは、2-3トレンチは深く2.0m前後、以外は1.0m前後である。

**土塁** 現存する東土塁の一部を除き上部を削り取られているが、下部1/2～1/4は土中に埋もれており、位置が確認できる。基底部の検出幅は5.1～6.0m以上で、基底幅は7.2～8.0mに復原できる。構築法は「叩き土塁」とよばれる工法を用いる。基底部をその幅で整地したのち、堀側に堤状の高まりを積み上げ、その上から土を叩き締めながら堀から内郭側へ傾斜して積み上げる。西土塁は基底幅が約5.1mとやや狭い点、南土塁は基底部の整地をおこなわない特徴がみられる。

北東の「隅切り部」は未調査であるが、現況の幅が10.0～11.0mと極端に広く、またその内側北よりに、上面を硬化した、内郭遺構面より一段高い面が構築されていた。櫓などを設置した基礎部分と思われる。

**内郭** 内部は西土塁（基底面レベル28.6m）から東土塁（27.9m）へ緩やかに傾斜する面につくられる。調査では、郭内を土塀などの区画施設によって区画すること、ピットの分布が密な区画施設の西側、つまり主郭中央部に何らかの施設が存在したと、ピットの分布がまばらな区画施設の東側と廃棄土坑が並ぶ調査区南端は空地であった可能性が高いことを確認した。

**外縁部** 堀周縁の西および北の地域で、物集女城存続期である15～16世紀代の遺構を確認した。「西外郭」では、物集女城存続期である16世紀前半～中頃の大型溝、礎石建物、掘立柱建物、柵、土坑などを検出しており、城館に接して居住域がひろがっていたことが確認できた。先後関係は確認できなかったが、溝や建物の方位は、内郭の施設に沿うもの、調査地の西を通る南北道路とほぼ並行するもの、さらに西へ振れるものがある。

「北外郭」・北西部では、東西方向から東で南に屈曲する土塁状施設の基礎、13～15世紀代の溝、井戸などを確認した。土塁状施設、溝は字「中条」の北境界に沿って位置する。また字「中条」の北西隅に位置する中海道遺跡第37次調査でも字の境界に一致する石組み溝、土壇を確認した。

**出土遺物** 土師器・皿では、出土総数376点のうち、内郭から147点、(39.1%)、内郭を含め字中条から291点(77.4%)出土しており、大半が城館周辺から出土する。時期としては、15世紀を境に量が急激に増大し、また京都系の皿が中心となる特徴がみられた。特に内郭および「西外郭」は京都系色が濃い印象を受ける。城館から離れた地点では13～14世紀が主で、15～16世紀のものはごくわずしか確認できない。また内郭および「西外郭」では半数程度が遺構から出土するが、離れた地点では、中海道遺跡第42次調査<sup>(文庫1)</sup>の土坑SK01が15世紀後半に比定される以外は、近世の遺構に混ざって出土している。また土塁構築土、整地層から出土した遺物を再検討したところ、16世紀前半の資料であると

判断した。したがって土塁の構築年代、つまり築城の時期は、従来よりも下る 16 世紀前半を一定点とする。陶磁器類では、青磁、染付などの磁器、備前・信楽・瀬戸美濃などの陶器類、瓦質土器が 58 点出土している。青磁は 14～15 世紀代に限られる、内郭では、国産陶器類が 15～16 世紀代に限られる、天目碗・香炉・茶釜など茶陶関係の土器類が確認できるなどの特徴がある。土師器・皿、陶磁器類ともに京都とのつながりがうかがえる資料である。

**平面形・規模** 以上の成果をもとに、城館の規模を復原する (第 98 図)。平面形は方形で、主軸が北で西に約 10～17° 傾く。方形であるが、北東角が隅切りされ (隅切り部)、東堀・東土塁は中程が東側へはらんでおり、ややいびつな形をしている。また西堀・西土塁は東・南・北にくらべて小さい規模でつくられていた。復原した規模は以下の通りである。

堀外側	南北 75～80 m
	東西 60～77 m
土塁外側	南北 60～65 m
	東西 50～60 m
内郭内法	南北 49 m
	東西 34～44 m

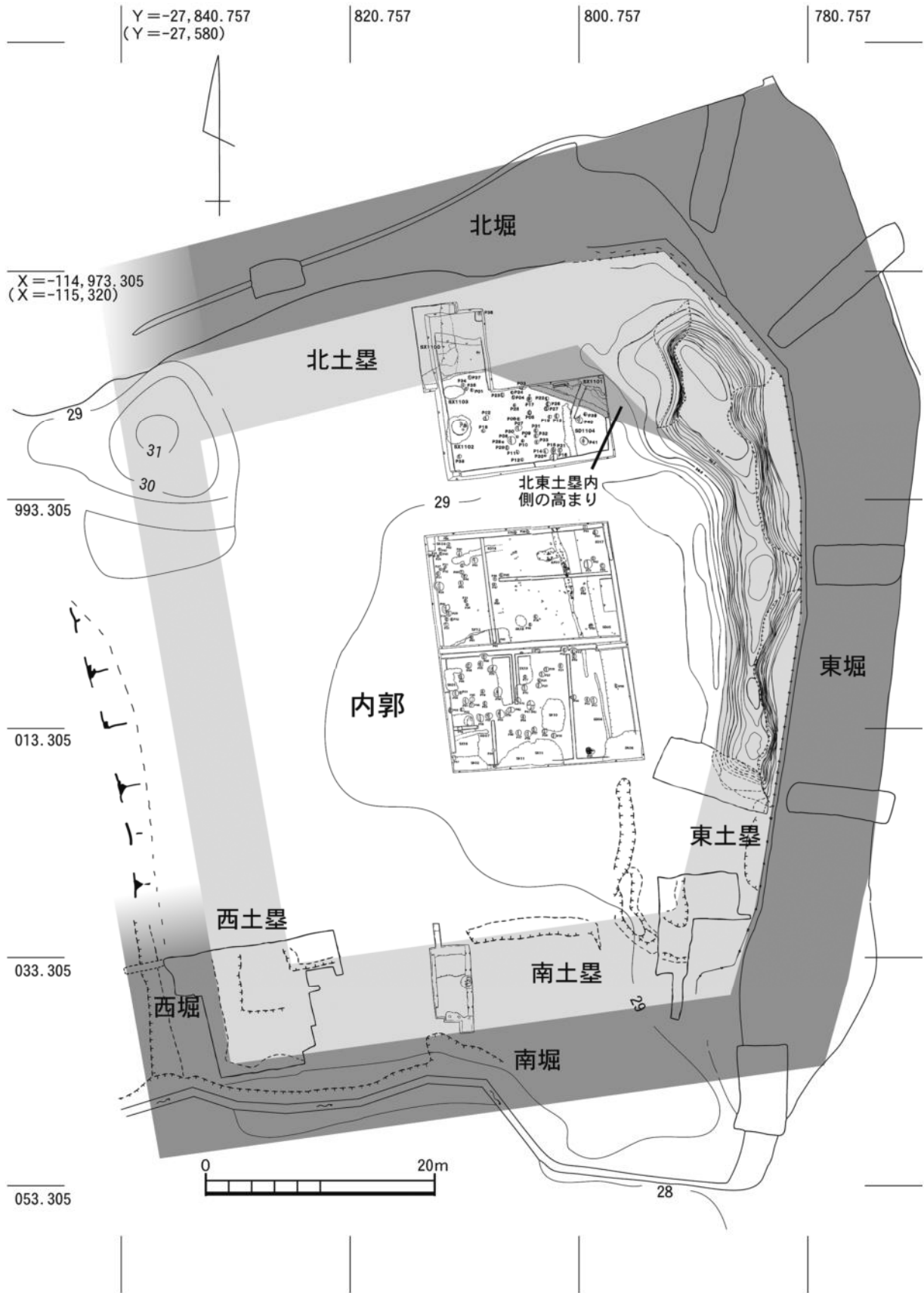
堀外側、土塁外側はすべてを確認していないので、確認できた成果をもとに復原している。ほぼ「南北約 75 m、東西約 70 m」の方形単郭式の城館である。

## 2 物集女城の評価と意義

物集女城は、物集女町「中条」に所在する、室町～戦国時代の方形単郭式の城館である。規模は、南北約 75 m、東西約 70 m で、乙訓地域のほかの中世城館とほぼ同じ規模、形態である。見晴らしのよい扇状地の縁辺に立地し、街道の結節点に近接して築かれる。城主は在地の物集女氏で、西岡惣国の国人の有力者であった。16 世紀前半に築城され、天正三 (1575) 年、物集女忠重入道宗入の謀殺によって廃城となったと思われる。

仁木宏氏は第 6 章第 2 節で、物集女氏をはじめとする乙訓・西岡の土豪たちと中央政権との関係を、時代を追って以下のようにまとめている。16 世紀前半、惣国の国衆として活動した彼らは、16 世紀後半になると三好長慶の政権確立とともに徐々に自治権、自立性を失っていく。長慶の死後、三好三人衆と松永久秀・三好義継の対立に巻きこまれ内部対立し、本拠地からの没落と復帰を繰り返した。仁木氏は「惣国の運動は解体した」と表現する。足利義昭を擁して織田信長が上洛すると、三人衆の一人、石成友通は勝龍寺城に籠城して対抗した。物集女氏は他の土豪たちと入城したが、落城後丹波へ逃げ落ちた。乙訓・西岡地域は細川藤孝の領国となり、土豪たちは藤孝と与力関係を結ぶ。逃げ落ちた土豪たちに対し調略をおこない、しばらくすると物集女氏は西岡に還住する。藤孝の主である義昭と信長の対立が深まると、物集女氏は信長方につき、信長の家臣として藤孝の与力となったと思われる。しかし藤孝にとって物集女氏は、領内に堅固な「城」を構え盤踞する存在で目障りであったことは間違いなく、宗入の暗殺、物集女城落城の原因となった。

城館は、幅 11.0～12.0 m 前後の堀、幅 7.2～8.0 m、高さ 2.1 m の土塁に圍繞されている。堀・土塁は、



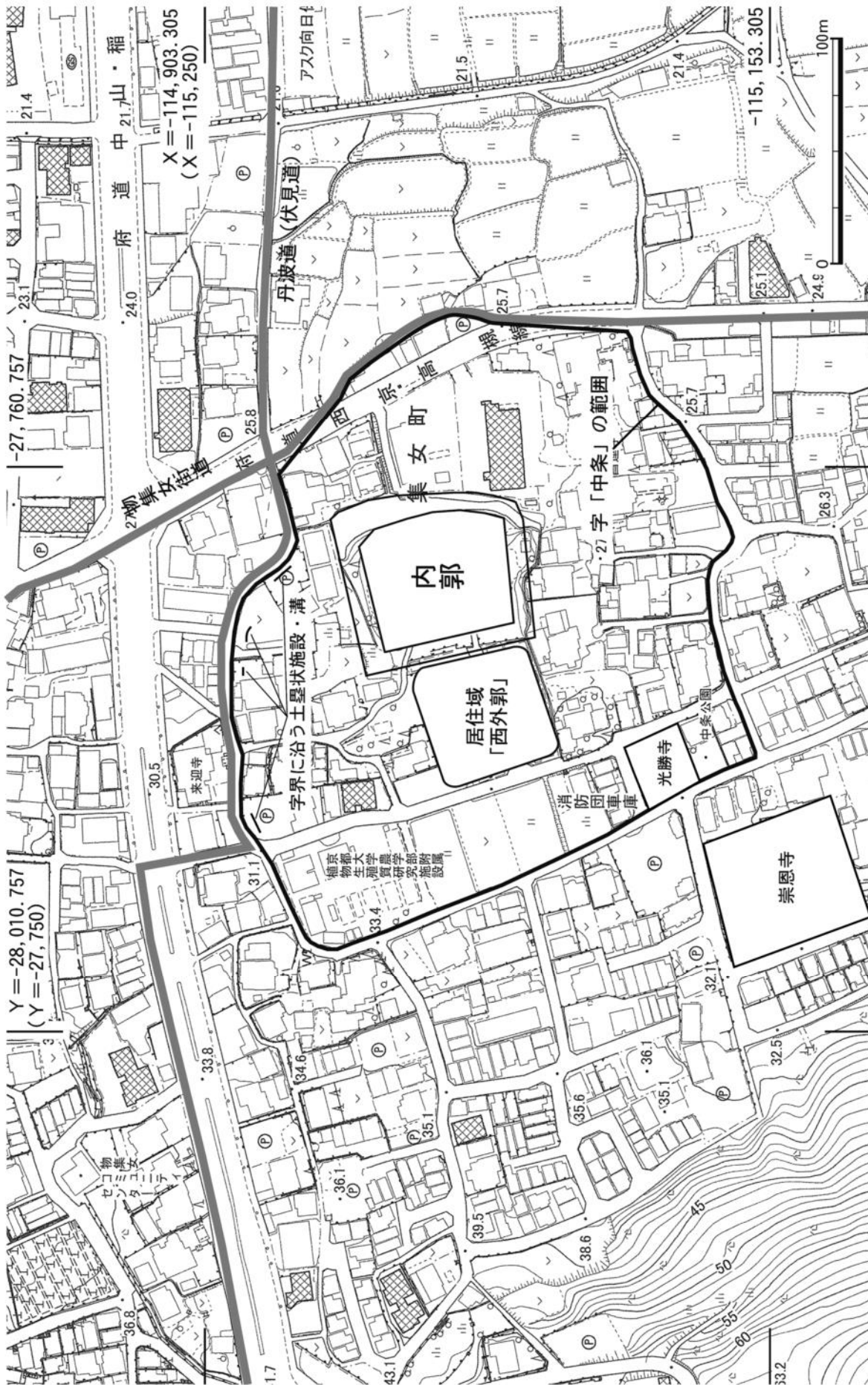
第98図 物集女城内郭復原図

①鬼門除けと考えられる、北東の「隅切り部」を中心に東土塁・北土塁は規模が大きいこと、また櫓などの施設がつくられていたこと、②東堀・東土塁が東側へはらむこと、③西堀・西土塁は規模が小さいことが特徴である。①・②は街道との関係、③は集落との関係によるものと考えられる。①は城館の北東に位置する、物集女街道と丹波道（伏見道）の交差点を望んでおり、②も地形に沿って東へ大きくふくらむ物集女街道にあわせるようにつくられており、交通の掌握を意図したものと考えられる。③は、西側が地形的に高いことも理由のひとつであると思われるが、「西外郭」が緩衝地帯として機能することで、防衛の一端を担ったと思われる。また堀について、山村亜希氏は第 6 章第 3 節で、城の防御機能に加え、周囲に広がる段丘上の水田への灌漑機能を指摘する。

内郭は、遺構が良好に遺存することが確認された。内部を土堀などで区画し、機能分化されていたと考えられる。また内部を区画することは、城館内の防衛にも機能したのと考えられる。ただし、ピットを多数検出したが建物に復原できず、物集女氏の居館の有無などその性格については今後の課題である。土師器・皿、陶磁器類などの遺物は、当時の中央権力である室町幕府や守護大名などとのつながりを示すものと考えられる。

中海道遺跡では、城館存続期である 15～16 世紀の遺構・遺物は、ほぼ字「中条」の地内で確認されていることが判明した。「西外郭」では、建物遺構の検出、多量の土器・陶磁器類の出土から居住域として利用されていた。遺物について、質・量ともに内郭と遜色ない内容で、内郭と密接な関係があったことを示している。主郭と「西外郭」の関係を、中井均氏は第 6 章第 1 節で防御域と居住域、福島克彦氏は第 6 章第 5 節で、物集女荘を管轄する公的空間と管理者の私的な生活空間と評価する。また「北外郭」や北西部では、字の境に沿って、溝や土塁状施設が設置されており、字「中条」が溝・土塁などで周囲を囲まれていた可能性が考えられる。ただし検出した溝には 15 世紀以前に掘削されたものもあり、15 世紀後半以降、文献にみられる集落を囲う防御施設「総構」という表現は適当でない。また内郭および「西外郭」では、物集女城築城に先立つ 15 世紀代の遺物も多量に出土しており、仁木宏氏が第 6 章第 2 節で指摘する、物集女氏の活動期間と重なる。15 世紀に物集女氏の本拠として、字「中条」中央部に集落として居住域がまとまり、南西隅には光勝寺・崇恩寺などの寺院が再建され、16 世紀前半に交通の結節点を望む東側に城館がつくられたものと考えられる（第 99 図）。

最後に、これまでの成果では解明できなかったいくつかの課題について述べる。まず内郭では、城主の居所である主屋をはじめ、内部の具体的な空間利用の様子が不明である。遺構の遺存状況がよく、礎石や柱痕跡を残すピットを多数検出したが、建物を復原するには至らなかった。中央部を中心に何らかの施設が存在したことは間違いなく、今後の調査に期待したい。また福島氏が指摘する、虎口（出入口）について、西側および南側の「張り出し部」に想定されてきたが、「張り出し部」については、第 4 次調査において 16 世紀後半～17 世紀前半の土師器・皿（第 48 図 - 160）が出土しており、廃城後南堀ともども、早い段階で南土塁を壊して造成された可能性が高い。加えてごく最近に東土塁の南端を壊して、現況の姿に造成されたことから、城存続期間に「張り出し部」は存在せず、虎口も設置されなかったとした。ただし、第 4 次調査は幅 1.0 m のトレンチ調査で、湧水もあり、十分に調査したとはいえない。面的な調査によってその有無を明らかにする必要がある。西側は、西堀・西土塁の規模、「西外郭」の土地利用から考えると、虎口が存在した可能性が高いと思われるが未確認である。城館の規模について



第99図 物集女城とその周辺

でも北・西・南堀の外縁は未確認であり、今回の復原においても推定の域を超えることができなかった。字「中条」の土地利用や集落としての様子も、調査が複数おこなわれた「西外郭」・「北外郭」では、多くの成果が得られたが、東部や南部などは調査される前に宅地化が進んでおり、成果を得ることが難しい状況である。

また「西岡」国人衆の城館との比較では、規模・形態は、上植野城（東西 73～74 m、南北 60～62 m）、開田城（東西 71 m、南北 67 m）、革島城（東西 46～48 m、南北 68～71 m）などとほぼ同じである。馬瀬智光氏が第 6 章第 4 節で指摘するように、西岡（乙訓）地域の城館は、その半数が一辺 100 m（1 町）未満、87%が一辺 200 m（1～2 町）程度と小規模で、突出して規模の大きい城館はつくられない。この状況の中井氏は、「盟主たちの城館規模が抜きん出たものでないこともわかる。惣的結合は決して突出した盟主を頂くものではなく、あくまでも横並びの共和的關係であったことを示している」と指摘する。また出土遺物の比較では、物集女城、上植野城ともに、嗜好品や茶陶関係の残存率が悪い点、備前・信楽・丹波・瀬戸美濃系など、京都市内で流通するものと変わらない点が共通すること明らかになった。

物集女城は室町末～戦国時代にかけて、京都近郊の国人層が構えた平地城館の典型例である。立地、規模、防御施設の構造、内部の土地利用など、得ることができた様々な情報は、戦乱の中にくらした物集女氏、物集女の人々の姿を彷彿とさせる。以上の課題も含め、乙訓地域の城館に関する調査研究が進展することを切に望む。加えて、土塁、堀が地上に残る景観を後世に伝えることはとても重要である。

#### 文献註

(文献 1) 田代弘「中海道遺跡第 42 次調査」『京都府遺跡調査概報』第 77 冊 1997 年